

再刊準備版

めさき

第19号

編集発行

「めさき」編集委員会

事務局

東京都千代田区三崎町

1-3-2

日本大学経済学部

1号館8階

当局の「逃亡」に 強力な歯止め

— 御両親、催告に踏みきる —

青木君死亡事件

4月19日、強制勧誘によ
って3年前に死亡した青木
雅彦君の御両親が、日大当
局（代表者理事鈴木勝氏）
に対し催告を行なった。損
害賠償請求を内容とする。
この催告によって、青木君
死亡事件の時は中断され
たことになる。（下記「催
告書」を参照のこと）
青木君の御両親に対し何
ら誠意を示さず、4月21日
の時刻を前に「逃げきり」
をはかっていた大学当局は、
新たな対応を迫られる事態

（解説）

77年4月22日、新入生青
木雅彦君は、中国拳法部の
強制勧誘によって死亡した。
その後、青木君の御両親は
何度か学部当局と直接交渉
を行ない、真相と責任の所
在を明らかにすることを要
求してきた。これに対し当
局は、自らにも中国拳法部
にも全く責任はない、と開
き直っている。この問題は、
国会においても2度にわた

主張

催告をテコに、
更なる真相究明を！

ついに、青木君の御両親
が損害賠償請求に踏みき
った。私たち編集委員は、こ
の催告を無条件で支持した
と考える。理由は、次のと
りである。
① 青木君が亡くなって以
降、御両親は何度も大学に
足を運び、あるいは質問書
を送ったにもかかわらず、
学部当局は、納得のゆく誠
意ある態度・回答を何ら示
していない。
② 青木君死亡事件の全容

めつけ、自らの責任を回避
することに終始している大
学当局の在り方は、著しい
ギマンである。

勧誘の危険性を何ら認識し
えていないばかりか、それ
による被害者を毎年絶え間
なく生み出させる情況に、

③ さらに、事件発生前か
ら現在に到るまで、強制勧
誘の横行を黙認し続けてい
る学部当局の姿勢は、強制
ない。

おおよび真相が解明されてい
ないにもかかわらず、事件
当初から、あらゆる事実を
ねじまげて「事故死」と決



左に掲げた写真は、今年
の中国拳法部錬心館（以下、
中華と略す）の勧誘光景で
ある。

強制勧誘の横行

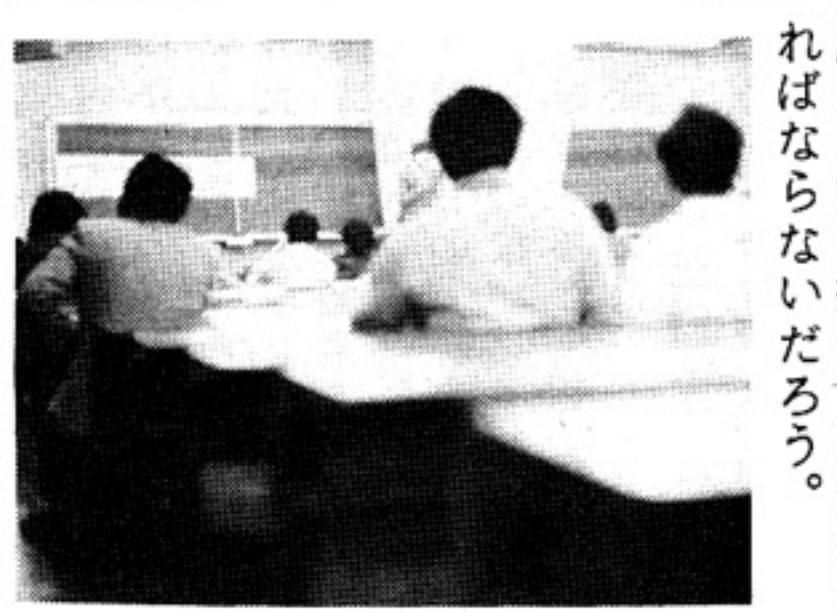
中止勧告はねのけ

映画上映会を開催

4月25日、学内企画研究
会主催による『灰とダイヤ
モンド』（ポラード映画）
上映会が、122番教室におい
て正午から開催された。
参加者は約30名と少なく

積極的に加担していると言
わざるをえない。このよう
な学部当局の在り方は、厳
しく弾劾されなければなら
ない。
今後、青木君死亡事件の
真相究明活動は、より具体
的に展開されると思われる
が、私たち編集委員は、以
前にもまして、その一翼をし
っかりと担ってゆきたいと
考えている。同時に、真相
究明活動への学友の参加を
強く要請するものである。

主催者側で当初予定してい
た討論会が充分にやりきれ
なかったとはいえ、上映会
の持つ意味は、それなりに
大きかったと言えるだろう。
まず第1に、この上映会
が実現するに到るまでの事
実経過に注目しなければな
るまい。4月17日に、企画
研による上映会とその情宣
ビラの届け出を一端受理し
た学生課は、同21日、企画
研に対し、一方的な上映会
中止勧告を行なった。その
理由は、「この間、君たち
（企画研）に申し出てきた
ことと同様である」（学
生課笹岡氏）。

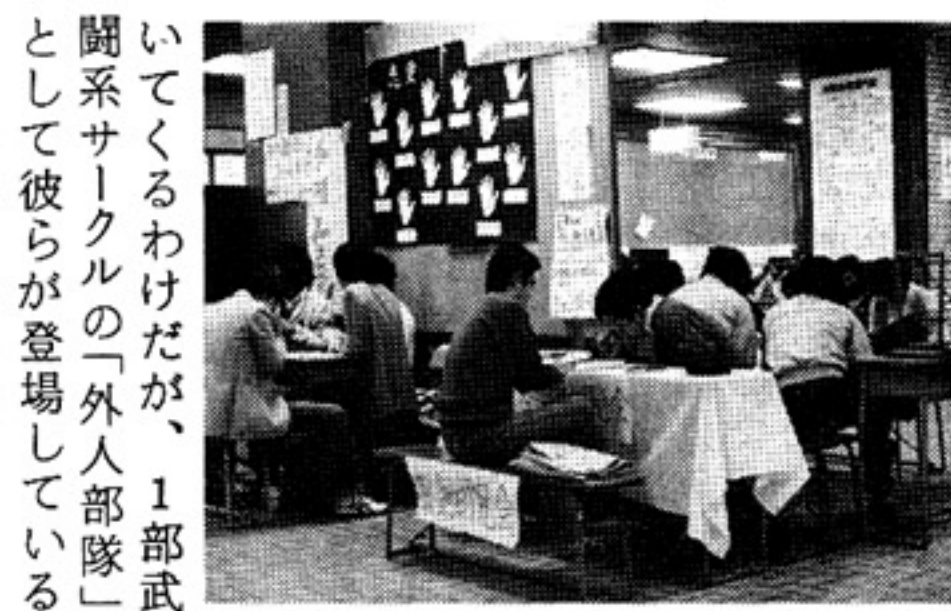


次に、上映会の意味を決
定づけたものとして、上映
会実現に向けての、企画研
の姿勢を挙げなければなら
ないだろう。それは、「許
可制」をはねのけ、学内で
自主活動を克ちとうろ／＼
（企画研のビラより）とい
う言葉に集約されていると
考えられる。上映会を、1
つの行動提起として、私た
ち経済学部生に突きつけた
ものと見えはしまいか。
現状、経済学部における
学生の自主活動を考える時

① 学生一般を対象とした企
画を行なうことは、一サー
クルとしてふさわしくない
② 映画は娯楽であり、学術
的でない、という2点にあ
ると考えられる。

一方で学外に活動の場を求
めるものがあり、他方では
サークル一般に顕著なよう
に、個別サークルボックス
を活動の場としているもの
がある。今一度、三崎町校
舎全てが私たちの場であり、
他者の場でもあることを確
認したい。それを学生証チ
ェックが拒み、「届け出制」
許可制が奪おうというの
なら、私たちはこれら諸制
度をも突き抜けていかなけ
ればならぬだろう。

誘と判断し、あるいは直接
介入を行なった内、最もは
なはだしかったのは、中華
と日本拳法部である。両サ
ークルは、新入生の肩に手
を回す、強引に前に立ち上
る等々の暴挙を、平然と
行なっていた。その実態
調査は、昨年に引き続き現
在着々と進められている。
ヤクザまがいの連中や、
乱闘服を着たオッサンが校
舎をのし歩いている姿も、
ひんぱんに見かけることが
できた。毎年この時期にな
ると、どこからともなく湧
き出てくるわけだが、1部武
闘系サークルの「外人部隊」
として彼らが登場している



事実には明白である。
このように、今年も、学
部当局の「厚い保護」のも
とに置かれた強制勧誘を根
絶することはできなかった。
なお中華は、本紙18号配
布期間中に、私たち編集委
員に対して次のような威し
をかけてきた。（御存知のよ
うに、18号2面に青木君事
件の特集を編集委員で組んだ
のだが）「3年前のじやね
グタグタこたわるんじやね
え。今度、おまえらの部
室に直接出向いてやるから
な／＼」

青木和夫青木房子両名の
代理人として以下の通り催
告致します。
右両名の長男青木雅彦
（当時貴大学経済学部一年
一八歳）は昭和五二年四月
二二日、貴大学経済学部本
館七階講堂において、同学
部サークル中国拳法部員の
入部勧誘を受け、籠手をつ

けて部員を攻撃するという
試技を行ううち、その場で
倒れ、同日午後九時五分頃
貴大学付属駿河台病院にて
死亡いたしました。右事件
は、有無を言わせず新入生
を誘い込み、十分な準備も
なく過激かつ危険な試技を
行わせるという中国拳法部
学生の入部勧誘方法に原因
があり、貴大学のこれに対
する指導監督義務違反によ
って生じたものであります。

よって、貴大学に対し、右
事件の損害賠償金として金
八千万円の支払を請求いた
します。
昭和五五年四月一九日
右両名代理人弁護士
黒田 純 吉
東京都千代田区西神田二丁
目六番一六号
被催告人
学校法人 日本大学
代表者理事 鈴木勝殿

言
い
っ
放
し

我々の大学には、キャン
パスがない。運動するとい
ったら、せいぜい卓球かキ
ャッチボールぐらいである。
しかし定岡（兄貴のほうよ）
のような強肩の人は、絶え
ず下を歩いている通行人に
球をおつけてしまう恐怖を
感じなければならぬ。ピ
ンポンをやっている人は、
壁におつかない恐怖と戦わ
なければならぬ。▼とにか
く、我々は運動不足だ。こ
の学校の体育実技は、健康
なイメージとかけ離れてい
るし、せいぜい週に1回だ。
しかし皆さん、案ずる事は
ありません。学校の人は、
よく考え、サークルボック
スを6・8階に集めてくれ
て、エレベーターも2基し
て、作ってくれませんか。こ
れは、ひとえに、我々に階段
をのぼらせて運動不足を解
消させてくれようとする、
学校の人の温情です。▼皆
さん、うれしくて涙が出て
くるでしょう。うれしい事
は、それだけではありませ
ん。シーズンスポーツや体
育大会などでは、わざわざ
上福岡のような、ひなびた
味わいのあるド田舎（上福
岡近辺に住んでいる人ゴメ
ンナサイ）まで連れて行っ
て運動させてくれるのです。
▼なにせ我々は、明日の日
本を背負って立つ人材です。
タフでなければ生きてゆけ
ません。やさしくなくても
生きてゆけます。体力が第
1です。体力さえあれば、
どこでも寝れますし、飯も
沢山食べることが出来ます。
さういふ人は、学校の人も
かばってつれて、少々の事
なら目をつぶってくれます。
▼皆さんも、学校の人のそ
ういう暖かい気持ちがか
わらうなら、みんなスポーツ
をしましょう。
（正三）

天皇制の影

日大の黒い90年 を告発する

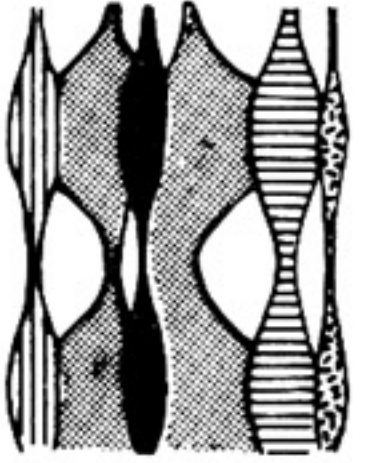
『日本大学の90年』批判

大学側は、真摯な学生の叫びに、自らの姿勢を問うかわりに、力でねじ伏せ学生を叫びを圧殺し、守ってきたこれまでの姿の中に「正常化」したのだ。

日大賛美の90年史に未来はあるか？

学園紛争の項を設け写真をバックにして、学生への憎悪と嘲りの解説を加えても、真に大学側が大学のあり方について自ら問うてきたと説く力にはならない。私学の独立・学問の独立・大学の自由を、大学側が学生によって問い直された時、力でつぶすことに応えた日大の「大学側が一丸となって対応していった姿勢」は、建学の精神のイデオロギーを、体制と結びつきつ自ら体制の先兵たらんとし守りぬいてきた九十一年の姿と重なり、それを、「私学としての独自の地位を築いた底知れぬ力強い地盤」と、自らを持ち上げ、「未来へ新しい一歩を踏み出す」のだと言われている。「正常化」の中で現在を送る日大生は、寒々しい未来と力の誇示への嫌悪感を抱かざるをえない。

『日本大学の90年』なる本が、本年三月、卒業式で配布された。非売品であるこの本は、某国営放送局発行の『歴史へのX』顔負けの豪華な装訂なのだ。しかし、その中身はと言うと、写真と解説による九十年間の回顧という装いにしかかわらず、大学側が一貫して守ってきた姿を誇示する九十年間の悪臭が漂っている。学祖山田某の死から学園紛争まで、数度の大学存亡の危機を大学側が一丸となって乗り切ってきたと胸を張り、輝く未来があると強調しているが、読み進むにつれ寒々とした気分にはなるのだ。



建学の精神は力への屈服を強いるもの

建学以来見え隠れする天皇制の影は、創立六・七十周年式典への裕仁の出席を通して、「社会の変化と世界の動きに合わせ、一つの理想と計画のもとで独自の教育方針を貫いてきた」大学当局にとつての九十年の象徴として映る。建学精神の号令の下、常に体制側に身をすりよせることで守りぬいてきた九十年を見せつけられる思いである。その上で、貫いてきた教育方針が、「私学のあるべき指標」であると言ふに至っては、あきれ返って腹さえ立つてくる。

八十周年にかけて、これまで存在を無視されてきた学生が、大学のあり方、日大の姿へ根源的な問いを返し、大学側のこれまでの姿勢の解体を求め大きなうねりを創出した。

強制勧誘は野放しにされ、募集実には学生課に連動。おまけに、学生生活委は、詭弁を弄するの必死だ。

強制勧誘禁止

4月15日、新部員募集実行委員会(以下、募集実と略す)主催による「勧誘についての説明会」へ行ってきた。ここで若干、募集実について触れておくと、この組織は表向き、文化団体連合・音楽団体連合・体育団体連合会によって構成されている。しかし、内実は、体連の占める比重が大きく、体連の主導により動いている。



ご協力ください 入校時の学生証提示

本学部では、入校のとき学生諸君に学生証の提示を求めています。また、本学関係者以外の方の入校の場合も、必ず受付を通すことになっております。

学部がこうした措置をとっているのは、本学部を一般社会から隔離し、学生諸君を学部の意のままに飼いならすためであります。

学生諸君には煩わしいことかもしれませんが、外部からの授業妨害の恐れが無い現在も、社会の要請にみあった、「去勢され何ら意志表示することのできない」人間として学生諸君を世に送り出すため、やむをえず学生証提示を継続せざるをえません。

学生諸君は、その趣旨をよく理解され、学生証提示にご協力をお願いいたします。

〔「みさき」4月号より、1部加筆・修正を行ない転載させていただきました。〕

ワビを入れろ

4月21日10時、学生課から学内企画研究会に対し、呼び出しがかかる。内容は、①かねてから企画研が要望していた、学生生活委員会との話し合いを28日に設定する②映画上映会を許可することである(1面参照)。その3時間後、今度は、



「異常」の刻印を許すな!

小林忠太郎

三年間に二人の一年生が殺される?大学の恐ろしさは身近に体験している諸君が最も痛切に感じているにちがいない。

詳しい本紙で再三紹介された由であるが、早い話が「お宅の息子は生まれつき特殊な身体だったから死んだのだ。サークルの学生に、大学にも全く責任はない」というのである。



これは、放任できない恐ろしい話である。学生として責任をもって預った一人の前途ある青年の生命を、異常のレッテルを貼って葬り去ろうというのである。

「前」の青木雅彦君の場合、死因と責任の所在が、極めてあいまいに扱われようとしている。

詳細は本紙で再三紹介された由であるが、早い話が「お宅の息子は生まれつき特殊な身体だったから死んだのだ。サークルの学生に、大学にも全く責任はない」というのである。

「告発した私の言動を、『異常』といわざるを得ない」と農獣医学部当局は処分した。因みに、公金七百万円?を持ち逃げした富沢会計課長(経済学部)は、異常とは扱われず、休職→退職金を出して自然退職。

青木君を異常としたのは、身長割に心臓が小さい、とする医学的説得力の乏しい、解剖結果の歪曲判断にもとづく。

強制勧誘の日常化を放任し、「医」ぐるみで「異常」の刻印を捺して葬る?としたら、もはや「黒い巨塔」とでもいうべきではない。

(元・農獣医学部専任講師)

不受理制?

というわけで、募集実が何をやってたかと言うと、強制勧誘を野放しにしたついで、学生課の意志を代弁すべく「活躍」したのである。

同28日には、学生生活委員会(竹内・牧野・馬場教

募集実が企画研を呼び出す(何故か体連室へ)。何かと思つて企画研のメンバーが行ってみると、これまた、上映会に対するティのいい中止勧告であった。学生課の意を受けてか、「君たちの上映会は、許可されていないじゃないか」と強弁することしきり。

翌22日には、サークル会議(「届け出制」を拒否し、一貫してサークル活動の自主管理運営を追求し続けている団体)の構成パート、約和会と歴史研究会が募集実の呼び出しを食う。「君たちは、届け出をせずにはポスターをはっている。一筆ワビを入れる。これは校則違反だ」。募集実が学生課の優先機関だったとは、ついで知らなかった!

